

「全鍍連」 2022年 2月号 理事長のよこがお

新潟県鍍金工業組合 井筒 昇 (新潟メタリコン工業(株) 代表取締役)

「世界に誇る燕三条地区の金属加工業のルーツ」

金属加工品を中心とした「ものづくり」で有名な新潟県三条エリア。

当地で金属加工業が大きく発展した要因には信濃川の存在が大きかったといわれているのでここにそのルーツを調べてみたい。

現在の長岡市から新潟市にかけての信濃川下流域では氾濫を繰り返し、燕や三条は土地が低く、洪水でたまった水がなかなか引かなかった。

そこで、当時の出雲崎代官所奉行が、領民の救済策として江戸から釘の鍛冶職人を招き、農家の副業として和釘製造を奨励した。

元禄年間になると、越後平野西部の弥彦山で間瀬銅銅山の採掘がはじまった。

そこで、仙台や会津の鍛冶職人を呼び、彼らから銅加工の技術がもたらされ、銅器の製造が盛んになった。

また、燕や三条の南西部に位置する出雲崎は、江戸時代には佐渡の金や銀が陸揚げされたほか、北前船の寄港地だったので、鉄も運び込まれた。

当時の鉄の主な生産地は出雲地方で、江戸への流通には時間も手間もかかった。

そこで出雲から原料となる鉄を出雲崎に運び、燕や三条で加工し、水路や陸路で江戸へと運ぶ仕組みが作られた。

燕では銅加工の技術を生かしてキセルや鎚起銅器を生産するようになり、明治以降燕と三条は金属加工の拠点として、ますます鍛冶屋が増えたが、洋釘の輸入による和釘需要の減少という危機が訪れた。

そこで、三条は大工道具や打ち刃物を生産。

1911年（明治44年）には燕で手作りの金属洋食器も誕生。

現在、燕の金属洋食器の出荷額は新潟県が全国ダントツである。

その原動力が燕三条地区なのは言うまでもない。

今や、燕三条地区の金属加工業は国内のみならず、世界各国に輸出されている。

特に刃物や洋食器は、その品質や機能性の高さから、高級レストランからの引き合いも多い。

また、様々な有名企業からも委託を受け、クライアントの希望に合わせた製品を作り出している。

江戸時代から培われてきた燕や三条の高い金属加工技術は寂れることなく、新しい技術を取り入れて進化し、現代に受け継がれているのである。